＜全体分析＞

試験時間	90	分

解答形式

記述式と客観式の併用。

分量・難易（前年比較）

分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）

難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

・「東京工業大学の出題形式」を踏襲している。

・2019 年度以降、「２題合計で 3,000 語を超える長文」が出題されるようになり、この傾向は定着している。2019 年度から 2026 年度までの総語数は、「3,092→3,062→3,091→3,348→3,496（過去最多）→3,020→3,334→3304」で推移。

・2025 年度は分量が増えたことに加えて、英文自体の語彙レベルの難度も高くなったことで、「難化」したが、2026 年度は比較的読みやすい英文が採用され、設問数の減少も含めて「やや易化」したと言える。

・解答時間の目安は、大問Ⅰが 50 分程度、大問Ⅱが 40 分程度と思われるが、3,000 語超の英文量を試験時間内で読みこなすにはかなりの速読力が要求される。

出題の特徴や昨年度からの変更点

・長年にわたって「大問２題」という構成が継続しており、２行程度の下線部和訳・英訳および内容説明が中心という設問形式に変動はない。また、「超長文」での出題に伴い、内容一致や空欄補充などの客観式での出題形式も定着している。

・内容説明２問は、大問Ⅰが「70 字以内」で、大問Ⅱが「35 字以内」でまとめるように指示されている。例年 60～70 程度が標準的なので、大問Ⅱは大幅減と言える。該当箇所の的確な把握ならびに制限字数内にまとめる日本語の表現力が要求される。

・2020 年度以降、ほぼ一貫して「本文中の５つの空欄に、一括して与えられた５つの文のいずれかを入れる」という「文空欄補充問題」が出題されており、2026 年度も踏襲された。

その他トピックス

・2021 年度以降、和文英訳は大問ごとに１問が出題されており、全体で「下線部和訳４問と和文英訳２問」という組み合わせが続いている。

・2025 年度に続いて推論要素を含む内容一致問題が出題された。「本文の内容から判断して最も可能性の高いものを選ぶ」というこの傾向は、今後定着する可能性がある。

・定番となっている各長文最後の「内容一致」は、2023 年度から３年連続して、大問Ⅰが「10 の選択肢から一致するものを３つ選ぶ」形式で、大問Ⅱは「８つの選択肢から一致するものを２つ選ぶ」形式であったが，2026 年度は，大問Ⅱが「７つの選択肢から一致するものを２つ選ぶ」形式に変更された。

© 河合塾　2026 年

英語　　東京科学大学　理工学系　（前期）　2/3

＜大問分析＞

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
Ⅰ	読解総合	「科学研究におけるバイアス（偏向）の存在について」 （2036 words） ・内容説明 ・下線部和訳 ・和文英訳 ・空欄補充（選択） ・内容一致（選択）	・内容説明：指示文で解答の大枠が与えられているので、それを生かすとよい。下線部と解答に該当する箇所が大きく離れているので、「項目列挙→個別説明」という段落をまたいだ展開を落ち着いて追うことが大切だ。 ・和訳：構造的には特段難しさはないが、下線部(2)の sat back and waited（静観して待つ、悠然と待つ）という慣用句の訳出に苦労しただろう。また、下線部(4)contend with A も文脈から適切な訳語を判断する必要がある。 ・英訳：英語の構造をそのまま反映したような日本語が与えられているので、構造的な変換は容易だろう。「～を左右する」に当たる他動詞（shape、determine、influence など）を思いつくのが難しかったかもしれない。 ・空欄補充：選択肢には全て指示語や代名詞などの「連結の目印」が含まれており、判断は概ね容易。ただし空所 A が判断しにくいため、消去法的なアプローチも必要。 ・内容一致：1-6 は①②とも「本文の内容から判断して最も可能性の高いもの（most likely）を選ぶ」という推論系の問題。より深い内容理解が求められる。1-7 も「該当箇所を探す」のではなく、「内容理解に基づいて読み終えた部分から段階的に処理する」というアプローチが有効。	標準
Ⅱ	読解総合	「都市の移動手段の多様性」 （1268 words） ・内容説明 ・下線部和訳 ・和文英訳 ・空欄補充（選択） ・内容一致（選択）	・内容説明：the task の内容は同段落内に書かれており比較的容易に確定できるだろう。制限字数に余裕があるという点でも取り組みやすい。 ・和訳：２問とも文構造は把握しやすいため、部分ごとの訳出の適切さで点差がつくだろう。下線部(2)は the vast variation in our preferences の訳を、意味を損ねずに訳文全体にうまくなじませられるかがポイント。下線部(3)は more different from each other than they are from Americans を、その主旨が伝わる日本語にうまく変換する必要がある。 ・英訳：Ⅰと同様に英語の構造をそのまま反映したような日本語が与えられているので、構造的な変換は容易。suggest [propose] *doing* という表現を思いつくかどうかがポイント。 ・空欄補充：Ⅰに比べると代名詞などの「連結の目印」が少なく、前後との整合を「内容」で判断する必要が増している。たとえば That card のみに注目して 1.を D に入れるといった誤りを避けたい。 ・内容一致：間違い選択肢の判断が容易であり、大きく迷うところはないだろう。	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」
　難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2026 年

＜学習対策＞

・記述問題は「下線部和訳」「下線部英訳」「内容説明」が基本。「英語→日本語」「日本語→英語」の変換能力を徹底的に鍛えておく必要がある。和訳については、英文の構造を正確に反映しながらも、主旨の伝わる自然な訳語を心掛けること。英訳については、英文の文法構造が見えるような日本語が与えられるので、いわゆる「和文和訳」の必要性は低い。①基本的な動詞の語法を中心にSV構造を作り上げ、②接続詞や関係詞を用いてSV構造を拡大する、という文法知識の正確な運用能力を鍛えておこう。

・「超長文」による出題が定着しており、空欄補充や内容一致などの客観式の設問の比重も高い。長文客観式問題に対しては「解法・テクニック」を求めたくなるが、その土台となるのは英文の内容を正しく理解する能力。いわゆる「速読」も、正しく読める能力がなければ成り立たない。まずは、自分のペースでよいから正確に読む力を付けることが第一。そのうえで、制限時間の枠の中でバランスよく時間を配分して解答作業を行う練習を重ねるとよいだろう。

© 河合塾　2026年